

わいるとらいふ

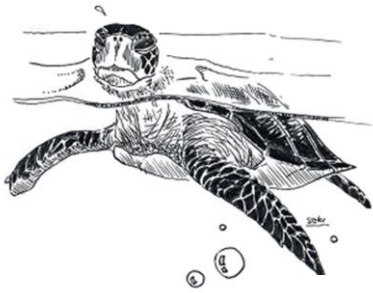
Wildlife

No.28

2012年9月15日

NPO法人 宮崎野生動物研究会

Miyazaki Wildlife Research Group



アオウミガメ、関

2012年度ウミガメ調査速報

今年のアカウミガメ調査は例年通り5月20日から8月10日の期間で実施され、無事に終わることができました。今年にはアカウミガメの上陸個体数が多く大変だったと思います。調査員の皆様、本当にお疲れ様でした。

アカウミガメ上陸産卵調査の各調査区域における調査結果の集計値を報告致します。今年のアカウミガメ上陸数は2840回となっており、そのうち産卵が1770回、戻りが1070回、産卵率は約6割という結果でした。この数値は8月21日時点でのおよその値ですので、最終的な集計結果には若干変動があると思います。

先にも述べましたが今年は驚くほどアカウミガメの上陸数が多く、上陸数2840回は昨年の上陸数の1351回と比較すると約2.1倍という結果になっています。これは宮崎野生動物研究会がアカウミガメの調査を開始して以来の最高記録であり、これまでの最高記録である2008年の結果(上陸数2480回)をも上回る数値です。アカウミガメの上陸数が増加するという事は非常に喜ばしいことですし、少し気が早いですが来年の上陸が楽しみです。

ただし、懸念材料もゼロではありません。海岸の幅が減少することによるアカウミガメの産卵場所確保が心配されています。また、海岸は常にその様相を変えるため、時にアカウミガメにとって厳しい環境にもなります。

写真のようにそれまで広い砂浜だったところでも波によって3m程の浜崖が形成されたり(写真の場所は170cm程の浜崖)、流木等のゴミが大量に流れ着いたりなど、アカウミガメの産卵や孵化した子ガメの障害になっている場所が見られました。



産卵場所



産卵場所に大量のゴミがたまっている様子 ゴミに阻まれ外敵に襲われた子ガメ

このような状況もアカウミガメの上陸・産卵結果とともにお伝えしていきたいと考えております。

現在データの集計・分析中ですので、調査結果の詳細は次号以降で改めてご報告できると思います。

古中 隆裕

アカウミガメとアオウミガメの違い

現在、地球上に生息するウミガメは7種(クロウミガメを単独種とすれば8種)とされています。そのうち、日本の近海に来るウミガメは、アカウミガメ、アオウミガメ、タイマイ、ヒメウミガメ、オサガメの5種です。特に、アカウミガメとアオウミガメは、日本近海で最もよく見られる種です。

それでは、アカウミガメとアオウミガメはどのようにして見分ければよいのでしょうか？ウミガメの体を詳しく観察してみることにしましょう。

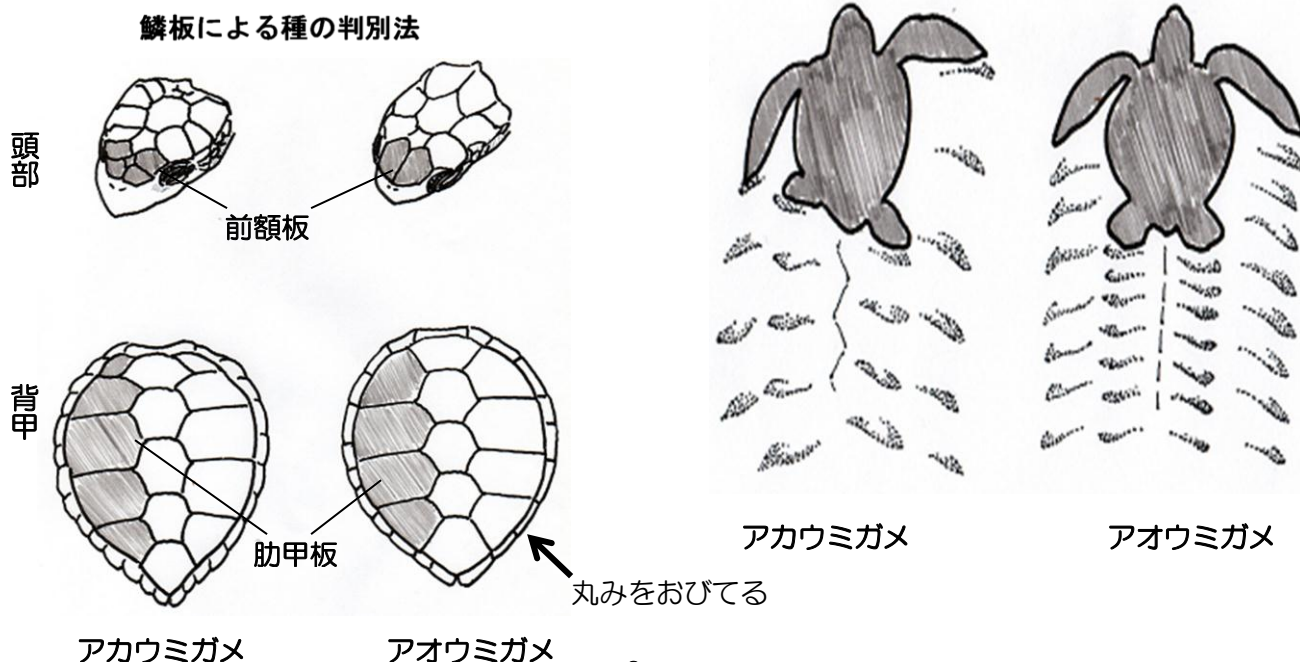
カメの体の特徴は、なんといっても^{カウロ}甲羅です。脊椎動物の中で甲羅を持つのはカメだけです。アオウミガメは図のように甲羅の後方が丸みをおびています。甲羅は60個位の骨でできており、^{ハイロウ}背甲と^{ウツロウ}腹甲に分かれています。骨でできた甲羅の上を、皮膚が覆っていますが、その皮膚も角質化し^{ウツロ}鱗を形成しています。ウミガメの体表を覆う鱗を^{リンばん}鱗板と呼んでおり、ウミガメの種を同定する際に重要な形質となります。アカウミガメは、下図のように^{センびやく}前額板が2対(4枚)又は中央に1枚を含んだ5枚であるのに対し、アオウミガメは1対(2枚)です。また、^{リョウこうばん}肋甲板にも違いがあり、基本的にアカウミガメが5対に対し、アオウミガメは4対です。

甲羅以外にも、全体的な見た目で頭部が大きく背側が茶色をしているのがアカウミガメで、頭部が小さく^{かがく}下顎にのこぎりのようなギザギザがあるのがアオウミガメと判別することもあります。食性は、どちらの種も雑食ではありますが、一般にアカウミガメは貝類をはじめイカ、タコなどの軟体動物やエビ、カニ、ヤドカリなどの甲殻類を、アオウミガメはアマモなどの海草やホンダワラなどの海藻類を主食としているようです。

最後に、産卵上陸時の足跡の違いを見ていきましょう。アカウミガメは本州、四国、九州から南西諸島、アオウミガメは屋久島以南の南西諸島で産卵します。上陸した雌個体は、前足と後足を器用に動かして、産卵場所を目指し浜奥へ這っていきます。この這い方に違いがあり、アカウミガメは左右の足を交互に動かすのに対し、アオウミガメは左右の足を同時に動かします。その結果、足跡の違いがはっきり出るため2種を判別できます。

山田 真太郎

足跡による種の判別法



ワライカワセミ

日南海岸を車で走ると、国道 220 号線沿いに大きなカワセミの看板が見えてきます。太い永い嘴、そしてコバルト色の背と橙色の腹部、色彩豊かなカワセミは、日南市のシンボルで市の鳥に指定されています。

さて、カワセミは主にユーラシア大陸の熱帯から温帯にかけて広く分布し、日本でも全国の平地から山地の川、池、湖など水辺に棲息し単独またはつがいで見る事が出来ます。カワセミは河川の川面をすれすれに勢いよく飛び、時に枝に止まり川辺に浮かぶ小魚を辛抱強く待ち受け、魚が水面に出てくると俊敏に頭からダイビングして確実に捕獲して食べるのです。美しい鳥ですが長い鋭い目つきにはやや恐ろしさもあるこの鳥も、今では山が荒れ河の水も減少し環境が悪く棲みづらくなったのか、数が少なくなっているのです。ところで、こうしたカワセミの仲間は世界に約 90 種生息していますが、中でも一番大きいのはオーストラリアに棲息するワライカワセミで、森林に棲息し昆虫や小型のは虫類や両生類を食べます。色も地味で背は黒褐色、腹部は白色。それに大きな嘴を持っていて、日本ではあまり知られていませんがオーストラリアではコアラ、カンガルーに次いで有名な人気のある動物です。それはユニークな人の笑い声に似た声で、ほぼ定刻に鳴くので現地人には時を教えてくれる森の妖精として愛されているのです。私もその笑い声に一度遭遇し、これは面白い、ぜひ動物園で飼育してみたいものだと思い購入することにしました。ところが折角の鳴き声は開園しない早朝と閉園して人がいなくなると鳴き出すのです。それはテリトリーコールと呼ばれ彼らの縄張りを仲間知らせる合図なのです。しかし、そのけたたましい鳴き声は実に面白く見事で、私は何とかしてお客さんのいる屋間に鳴いてくれないものかと実験することに



しました。まず、お店に売っている笑い袋を購入してくるとワライカワセミの檻の前に行き聞かせてみました。すると彼らはその袋をじっと見ながら「馬鹿にするなよ」と言わんばかりに口を閉じたままでした。そこで今度は彼らの泣き声を録音し、その声を聞かせることにしました。目の前でテープレコーダーを聞かせましたが、その声に慌てふためき、きょろきょろしましたがますます貝のように口は閉ざしたままでした。それではと私は小屋の後ろに周り見えないところで小さな音でレコーダーを鳴らしました。すると左右に頭を振り、その声のする方に向かって得意のケタケタという鳴き声を上げたのです。大成功でした。なるほど、縄張りを誇示していることに気が付きました。それからはいつでも聞きたいときはレコーダーを持って行くことにしました。ある日のこと、幼稚園児が団体でやってきました。私は子供を案内するとカワセミのところに来ました。この鳥は笑うんだよと子供たちに話をしました。すると子供たちは不思議そうに見ていましたが「君たちも笑ってみてごらん」、するとこどもたちは全員で「わはは・・・」と大声を出したのです、すると驚いたのかそれを見ていたカワセミ 4 羽が一斉に子供たちに返事をするように鳴き出しました。子供たちはその大きな声に驚くとともに鳥と心の通じたのに大喜びでした、そのほほえましい光景に私も嬉しくなりました。

竹下 完

想定外

私たちの日常生活の中で、時として予想もつかない出来事に遭遇することがあります。その最たるものの1つは、まだ私達の記憶に新しい東日本大震災ではないでしょうか。このような出来事を「想定外」の熟語をもって現代の流行語としてもてはやされています。私が遠い昔から現在までに遭遇した印象に残る3つの出来事を取り上げてみたいと思います。

1. 両性を持ったヤギ

今から60年もの遠い昔の話です。私が鹿児島県のある農業高校に入学して間もない頃。学校中にある噂が広がりました。それは、男性器と女性器を持ったヤギが生まれた…ということでした。当時の私たちの常識では有り得ないことであり、物珍しさと好奇心が重なって、畜舎に押しかけたものでした。その後、私は土木科に進み畜産科とは縁がなくなり、次第に噂も消えて、その後当のヤギは生きのびる事が出来たのか、死亡したものか、動静は伝わってきませんでしたが、今頃母校の標本棚にアルコール漬けにされて眠っているかもしれません。驚くべき想定外の話です。

2. 赤い卵

私達はアカウミガメの卵は、限りなくピンクに近いものとして固定観念を持って接して



います。過去20年間アカウミガメの卵を掘り続けた石崎浜で、ある日予想だにしない色付き卵に遭遇しました。赤く染まった卵。どうしたものかと掘り進み、最後の卵を掘り出そうとすると卵巣底が血液の溜りになって

いました。白い手袋も、作業服の袖も真っ赤に染まり、生臭ささえともなっていました。親ガメの体内の異変を即座に判断する事が出来ましたが、内出血とすれば親ガメの体内の血液の大部分が流出したのではないかと思われるくらいに、周囲の砂に真っ赤に染み込んでいました。すでに親ガメはいませんが、その後死骸が打ち上がる度に、あの時の親ガメではないかと今でも思い続けています。まさに心の痛む、想定外の出来事でした。

3. 青い卵

例にもれず、早朝の石崎浜で産卵痕を移植のために掘り出し作業をはじめました。掘り出



して卵を並べていくうちに、表面に青色の部分が点在しているのに気付きました。掘り進めるほどに青色が占める割合が大きくなりました。外部からの青色の影響は特に見当たらず、親ガメの体内でピンクであるべき卵の表面を青色に変化させる科学的、または医学的要素があるのだろうかという疑問に思いながら移植を完了したものでした。美しいピンクの中に青色の卵の混在は公害を思わせて、不気味ささえ感じさせる光景でありましたが、明日はまた別の色付き卵に遭遇するかもしれません。

これもまた、想定外というべき不思議なインパクトのある話です。

小豆野 次則

ウミガメ調査に参加して

賛助会員になって初めてウミガメ調査に同行させていただきました。趣味で海に潜ったりしており、海の生き物に関心が高まっていた矢先に、今回のウミガメ調査に随行することが出来ました。当たり前ですが、何時も陸上で生活しているため、海の生物はとても新鮮で神秘的な存在です。最初、暗闇に大きな影を見つけたときは、大興奮してしまいました。さらに驚いたのはタマゴの皮の薄さでした。あんなに薄い皮でよくふ化するまで砂の中で生き残れるなあ、熱い砂で温泉卵にならないのだろうかと心配しました。

考えさせられたのは、ウミガメが産卵をあきらめ、海に引き返した足跡がたくさんあったことです。陣痛(?)に苦しみながら必死に産卵場所を探しているのに人工構造物が、それを困難にしているのは残念なことだと思いました。遠い海をはるばる泳いで、産卵場所として選んだ宮崎の浜辺を、ウミガメが安心して産卵出来る環境にせねばならないのだなと強く思いました。今まで野生動物保護活動に関心があったのですが、実際に研究や取り組みをしているのがわからなかったため、今回の調査の体験は貴重な経験となりました。幸いにも2頭のウミガメに遭遇でき調査員のみなさんに感謝しております。

畑 典子



やんばるの森にすむ「アガチ」



「キョキョキョキョ…」 外村 浩幸
夕暮れ時、沖縄本島の北部に位置する「やんばる」の林道を車で走っていると、ひときわ大きな鳴き声が聞こえてきます。この声の主は「ヤンバルクイナ」です。私は一昨年まで沖縄に住んでいたのですが、そのときに関わっていたヤンバルクイナについて少しだけご紹介したいと思います。

1981年、「60年ぶりの新種発見!」と報じられたヤンバルクイナは、世界中でやんばる地域(沖縄県本島北部)にしか生息していない鳥で、特徴は赤い目と赤い大きな嘴、お腹の黒と白のまだらの羽毛、そして無飛翔、飛べないことです。地元では新種発見と報じられる前から知られていた鳥で、「アガチ」(慌て者)やマドゥイ(山の鳥)と呼ばれていました。飛べないということで声でのコミュニケーションが発達しており、冒頭で書いたソングと呼ばれる声でお互いの位置を主張しあうかのように鳴き、特に繁殖期にはやんばるの森がとてにぎやかになります。

今このヤンバルクイナが絶滅の危機に瀕しており、発見当初3000羽程いましたが、わずか20年ほどで1000羽前後まで減ったといわれています。その原因は人が捨てたイヌやネコによる捕食、ハブを駆除する目的で移入されたマングースによる捕食、そして交通事故です。今年は特に事故が増えており過去最悪の事故件数になっています。環境省や沖縄県、NPOの保護活動により少しずつ個体数は増えてきていますが、まだまだ、油断の出来ない状況です。

もしみなさんが沖縄のやんばるにお越しの際にはゆっくりと走ってみてください。少しの心遣いがヤンバルクイナを守ることにつながります。もしかするとヤンバルクイナをはじめ貴重な野生動物がみられるかもしれませんよ。

次は、長友 宏子さんにお願いします。

野生研のあしあと

- 5/28 野生研 24 年度総会 (東大宮地区社協会議室)
- 5/30 5月のウミガメ上陸産卵数は今年の5倍
- 6/1~30 「ウミガメ展」開催 【竹下・石井】
写真展(平和台はにわ館) 1400名見学
- 6/2~6/3 24年度のカモシカ調査予備調査開始
- 6/15 「わいるどらいふ」27号発行
- 6/19 野生研6月月例会(大宮青少年プラザ)
- 6/24 日本ウミガメ協議会より砂中温度計測の温度計の埋設依頼。明神山・大炊田・一ツ葉海岸に埋設
- 6/29 24年度動植物調査開始第1回会合(県庁会議室)
- 7/4 野生研運営会議(学園木花台ジョイフルにて)
【竹下・岩本・中村・岩切】
- 7/5 児玉事務局長心筋梗塞で緊急入院
- 7/9 カモシカ3県合同会議(大分市)に出席【岩本・岩切】
- 7/14 24年度第1回カモシカ調査(東郷町西林山周辺)
- 7/15 カモシカ調査(行藤山・可愛岳周辺)
- 7/16 カモシカ調査(日向市冠岳周辺)
- 7/17 野生研7月月例会(大宮青少年プラザ)
- 7/18 オーシャンライオンズクラブよりウミガメ保護の助成金10万円をいただく
ウミガメについて講演【竹下】
- 7/20 日南鶴戸講演会【竹下】
- 7/21 海岸清掃 オーシャンライオンズクラブ・住友生命保険KK職員・ボーイスカウト宮崎15団・野生研会員約50名が参加し一ツ葉海岸を清掃した。
- 7/23 児玉事務局長死去
- 7/30 台風9号接近
- 8/1 台風10号接近
- 8/10 24年度ウミガメ調査終了
昨年の2.1倍が上陸した。

動物記録

- 5/23 宮崎市一ツ葉入り江、コアジサシ卵全滅。
カラスによる被害可能性大。【宮崎日日新聞】
- 5/26 新潟県佐渡、放鳥トキひな初の「巣立ち」。
野生、国内38年ぶり。【宮崎日日新聞】
- 6/2 宮崎市フェニックス自然動物園、コフラミンゴの赤ちゃん誕生。【朝日新聞】
- 6/26 ガラパゴス諸島、絶滅危惧の象徴ガラパゴスゾウガメ「孤独なジョージ」死ぬ。【宮崎日日新聞】
- 6/29 宮崎市フェニックス自然動物園、キリンとシマウマの赤ちゃん誕生。【宮崎日日新聞】
- 7/4 ラムサール条約、荒尾干潟を登録。九州では4例目。【西日本新聞】
- 7/12 上野動物園、赤ちゃんパンダ死ぬ。母乳、気管支に入り肺炎。【宮崎日日新聞】
- 7/12 綾町「エコパーク」登録。国内32年ぶり5カ所目。自然保護と地域振興評価。【宮崎日日新聞】
- 7/27 竹下完会長、鶴戸地区でアカウミガメ講演会。【宮崎日日新聞】
- 7/28 都井岬沖、九州最大規模のサンゴ群落確認。【宮崎日日新聞】
- 8/7 日南市風田浜、アカウミガメのふ化確認。【宮崎日日新聞】

新会員の紹介(敬称略)

- 正会員：中林 朗・徳嶺 燿子・岩廣 洋文
前田 幹雄・岩切 久・西田 伸
- 賛助会員：堀川 隆洋・竹内 佳子・今里 明子
高妻 浩子・窪 かおり・松下 マサ子
清水 準一



宮崎野生動物研究会通信「わいるどらいふ」 No.28 2012年9月15日発行
特定非営利活動法人

宮崎野生動物研究会 (Miyazaki Wildlife Research Group)
代表 竹下 完

880-0825 宮崎市東大宮3丁目9-11

Tel 0985-25-7585 Fax 0985-25-7585

Email: kan-take@miyazaki-catv.ne.jp http://www.m-yaseiken.org



サルトリイバラ

「わいるどらいふ」の無断引用、転載、複製を禁止します。